輝きつづける、私

Role Model Book

女性研究者・技術者支援が拓く未来に向けて

現在、様々な分野で「女性活躍」「ダイバーシティ推進」がキーワードとなり、その機運が高まっています。筑波大学での取組も、「女性教官懇話会（仮称）」の発足（平成9年）から始まり、大学全構成員のダイバーシティ推進とキャリア支援を目的とした「ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター」の設立（平成27年）へと受け継がれてきました。

しかし、未だ多くの課題が残ることも事実です。例えば理工系分野における女性の少なさや意思決定に携わる女性上位層の少なさといった「数」の問題のほか、男女を問わず意識改革の不十分さ等が挙げられます。そうした点からも、女性の多くがキャリア形成に少なからず困難を抱えている状況は解決されていません。

女性研究者・技術者にとって、これらの課題の解決を後押しする大きな可能性を秘めたものが、ロールモデルとなる先輩の存在です。それも、遠く先を歩く先輩だけではなく、今の自分にとって次のステップを歩く先輩の存在は、目の前にある課題だけではなく、次に起こりうる課題への気づきや解決のヒントをもたらしてくれます。このロールモデル集には様々な分野と世代の女性研究者・技術者の方が登場します。一人ひとりの足跡は、それぞれが乗り越えた、あるいは乗り越えようとする課題と解決のための試みや、その先に見える風景を示しています。それらは女性だけではなく、将来のキャリア形成を模索する多くの人の背中を押してくれるものとなるはずです。

女性研究者・技術者支援の本質は、誰もが安心して能力を発揮できる環境を実現することで、女性だけではなく多くの可能性を有した多様な人材が集まり、困難な社会課題を解決しうる新たな研究成果が生み出されることです。こうした女性研究者・技術者支援が「拓く」未来を実現するためにも、是非ロールモデルの先輩から多くを学び、自らのキャリアを切り拓いてください。

国立大学法人筑波大学
ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター長
五十嵐 浩也
Hiroya Igarashi

04 page

小野薬品工業株式会社 研究員
岡 実穂さん
Miho Oka

05 page

筑波技術大学
障害者高等教育支援センター 講師
大鹿 綾さん
Aya Oshika

06 page

森林総合研究所 研究員
三好 由華さん
Yuka Miyoshi

07 page

筑波大学 数理物質系化学域
アイソトープ環境動態研究センター
准教授
坂口 綾さん
Aya Sakaguchi

08 page

筑波大学 医学医療系 准教授
涌水 理恵さん
Rie Wakimizu

09 page

森林総合研究所 主任研究員
永田 純子さん
Junco Nagata

10 page

日本IBM
ソフトウェアエンジニア
文 連子さん
Lianzi Wen

11 page

筑波大学 人文社会系 准教授
井出 里咲子さん
Risako Ide

12 page

農業・食品産業技術総合研究機構
主任研究員
國久 美由紀さん
Miyuki Kunihisa

13 page

株式会社生体分子計測研究所
研究員
馬 冬梅さん
Dongmei Ma

Role Model Book Contents

14 page

産業技術総合研究所 主任研究員
小野 恭子さん
Kyoko Ono

15 page

エーザイ株式会社 主幹研究員
三橋 薫さん
Kaoru Mitsuhashi

16 page

日本IBM 理事
シニア・グローバル・プロジェクト・エグゼクティブ
浅川 恵理さん
Eri Asakawa

17 page

農研機構食品研究部門
食品健康機能研究領域長
山本(前田)万里さん
Mari Maeda-Yamamoto

18 page

筑波大学 副学長・理事（国際担当）
キャロライン・ベントンさん
Caroline F. Benton

19 page

アサヒビール株式会社
製品保証センター所長 理事
山岸 裕美さん
Hiromi Yamagishi

20 page

茨城県立医療大学 保健医療学部 教授
加納 尚美さん
Naomi Kano

21 page

物質・材料研究機構
構造材料研究拠点 副拠点長
御手洗 容子さん
Yoko Yamabe-Mitarai

22 page

筑波大学 グローバル教育院ライフイノベーション学位プログラムリーダー
筑波大学 生命環境系／北アフリカ研究センター 教授
産業技術総合研究所触媒化学融合研究センター クロスアポイントメントフェロー
礒田 博子さん
Hiroko Isoda

23 page

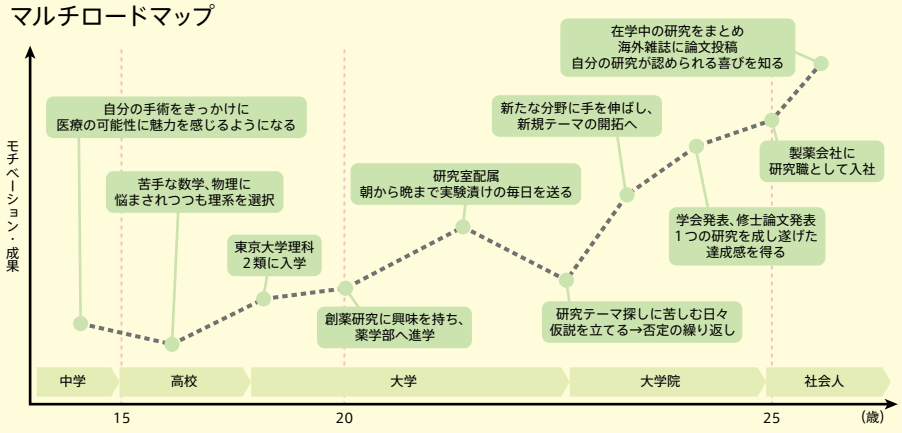
筑波学院大学 学長・教授
筑波技術大学 監事
大島 愼子さん
Chikako Oshima

研究者を選んだ理由

子どもの頃、脊椎側弯症という背骨が曲がる持病を抱え、小学生の頃は全身にコルセットをつけて生活していました。運動をすることも遠出をすることもできず、可愛い洋服も着られません。しかし中学生のとき手術を受け、すっかり健康になり生活が一変しました。その経験をきっかけに、医療の可能性に魅力を感じるようになりました。薬学部に進学したのは、何か一つ良い薬ができれば、世界中のたくさんの人を助けられることに強く興味をひかれたからです。

大学院では分子生物学の研究室に入り、細胞の分解系の研究をしました。自分で見つけた新規テーマで、修士論文を執筆。一つの研究を成し遂げた達成感を得ることができました。大学院修了後は、研究成果を社会に送り出せるような研究をしたいと思い、製薬会社に入社しました。

マルチロードマップ



自分の手術をきっかけに医薬品の可能性に着目

小野薬品工業株式会社 研究員

岡 実穂さん

Miho Oka

東京大学薬学部を卒業後、同大学院薬学系研究科で修士（薬学）を取得。
小野薬品工業（株）に入社し、筑波研究所先端医薬研究部に研究職として配属。

あの時のこと

「やりたいこと」で進路を選択

高校時代は文系科目の方が得意で、数学や物理が苦手。それでも得意不得意ではなく、自分が何をしたいかで進路を決めました。薬学部に進んで苦労はしたものの、いまでは希望通り研究職に就き楽しく仕事をしています。学生時代は学問と実験に没頭する一方で、バドミントンと茶道のサークル活動、海外旅行なども楽しみ、充実した日々を過ごしました。海外の絶景を見たり、文化の違いを肌で感じたりした経験は、私の視野を広げてくれたと思います。

私の仕事

私が配属されたのは、先端技術を社内に取り入れていく部署です。現在は、ビッグデータなどを活用して創薬標的を見つける仕事に携わっており、ヒトのゲノム情報を活用したり、病気の組織と正常な組織の遺伝子を比較したりしています。

仕事を通して、一つの薬ができるまでには創薬標的の探索、創薬デザイン、合成など、さまざまなチームが関わっていることを実感しました。新薬開発は、約3万もの候補のうち世に出るのは1つという極めて難しいものです。その1つを創るプロセスに、自分が関わるのが最大の目標です。周囲には素晴らしい仕事を成し遂げた研究者がおり、一緒に働けることはとても嬉しく、刺激になります。

筑波技術大学 障害者高等教育支援センター 講師

大鹿 綾さん

Aya Oshika

東京学芸大学教育学部を卒業後、同大学院で博士（教育学）を取得。聾学校や聴覚障害者福祉施設の非常勤教員、広島大学助教などを経て現職。

聴覚障害のある人がハッピーに生きられる社会に

研究者を選んだ理由

中学生のとき、重度障害者施設のイベントを手伝いに行き初めての世界にショックを受けました。「知らないから怖いと感じる。それなら勉強して知れば良い」と考え、大学で特別支援教育を専攻。そこで濵田豊彦先生と出会ったことが、人生の転機となりました。濵田先生の専門は聴覚障害で聾学校や研究会など様々な所に連れて行ってくれました。特に、中途失聴者の読話講習会では人生半ばにして聞こえなくなった方へのメンタルサポートの重要性を教えていただきました。そういった中で、何も出来ない自分が歯痒く、聴覚障害というものと真剣に向き

合って行こうと考え、大学院で勉強を続けることを決意。初めから研究者を目指していたわけではなく、自分がやりたいことをするために辿り着いたのが大学教員だった、というのが正直なところです。

私の仕事

学生時代から現在にいたるまで一貫して、聴覚障害と発達障害を併せ有する子どもの支援を研究テーマとしています。“聞こえない”だけでは説明し切れない苦しさを抱えている子どもたちを、もう一度違う目線で見直し、新しいサポート法を構築して広く発信するのが目標です。また、大学教員として教職課程部門を担当しており、聴覚障害や視覚障害を持つ先生を育てています。

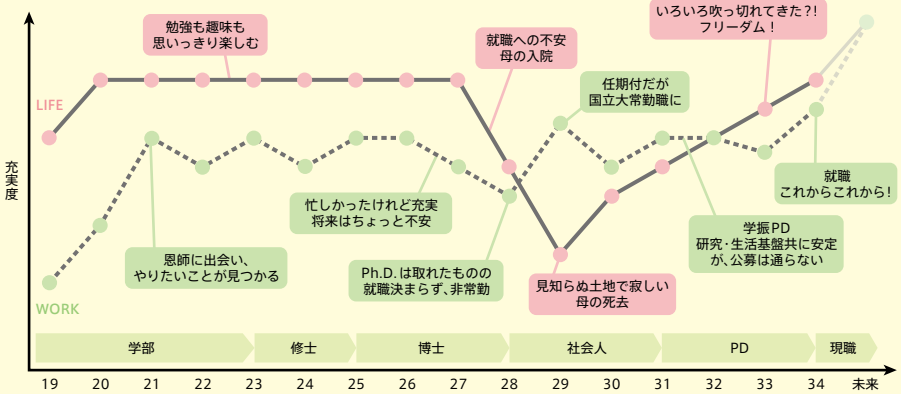
私は「人」に恵まれ、子どもたちや保護者、聴覚障害者の方々に多くを学ばせていただきました。それこそが私の財産です。研究と生活の基盤が安定した今、これまで出会ってきた方々に少しでも恩返しできるような活動と研究をしていきたいと思っています。

あの時のこと

学習活動『ダンボ』がライフワーク

聴覚障害と発達障害を併せ有する子どものための学習活動『ダンボ』を立ち上げ、月2回の活動を11年間続けてきました。参加者一人ひとりに合わせて目標と指導方法、教材を検討しています。今後もライフワークとして活動を続けていくため、現在は後輩の学生を育てているところです。聞こえない、聞こえにくい子どもたちが自分らしくのびのびと実力を発揮できる社会づくりに携わり、みんながハッピーな人生を送れるようお手伝いをしていければと思っています。

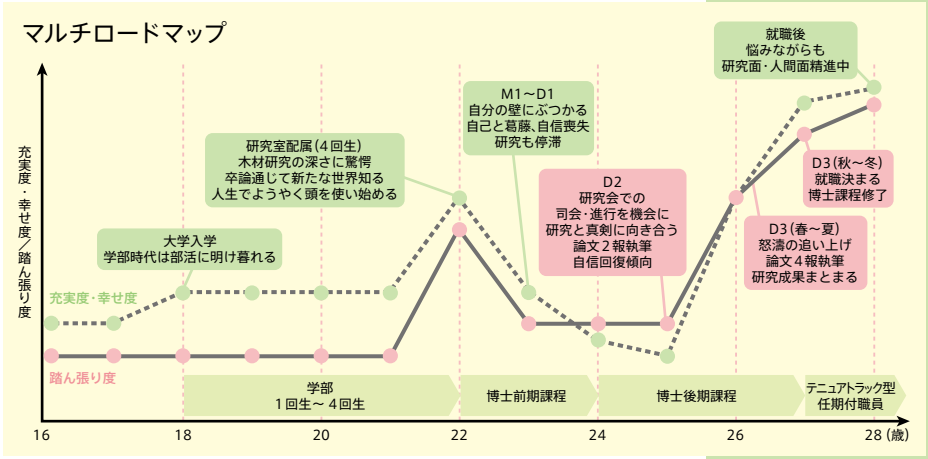
マルチロードマップ



研究者を選んだ理由

実家が建材製造業（突板加工）を営んでおり、木片で遊んで育った私は、木を深く知りたいと思い森林科学科に進学しました。高校までの受け身の勉強とは違い、大学は研究課題の設定から解決策の探求まで、自立して学び取らなければなりません。それに苦労し、博士課程に進んだ後も闇の中にいるようでした。転機は博士後期課程2年のとき、学会研究会の講師にお招きした木材レオロジー研究の大家・徳

本守彦教授（信州大学名誉教授）と対談形式で司会進行を務めたこと。それを機に研究の面白さに目覚め、論文執筆が一気に進みました。そのような機会を与えてくださった恩師、古田裕三教授の指導に感謝しています。就職についてはあまり考えず研究に専念していましたが、公募の情報をいただいて応募し、現在の研究室に20年ぶりの新人として採用されました。



身近な木材から新たな発見の連続

森林総合研究所 研究員

三好 由華さん

Yuka Miyoshi

京都府立大学農学部を卒業後、同大学院生命環境科学研究科で博士（農学）を取得。
森林総合研究所に入所し、木材研究部門　木材加工・特性研究領域に所属。

あの時のこと

演習林のすべてが教育の道具

京都府内に大学の演習林があり、枝打ち、伐採、乾燥、製材、炭焼きなど一連の経験をすることができます。野生の鹿を捕まえたり、作った炭を使ってバーベキューをしたりと、実習林のすべてが教育の道具。森林科学科は男女の比率が半々ですが、女子学生の方が活発で、炭や木粉まみれになって雨が降り出しても作業を続けたりしていました。木の研究は新たな発見が常にあり続け、完全には分かり得ない材料だと思いますが、そこが最大の魅力です。

私の仕事

私が取り組んでいるのは、木材を非破壊で評価する技術の開発です。たとえば木材の強度や水分量を調べるとき、切り倒して壊れるまで曲げたり、小さく切断すると建材として使用できなくなってしまいます。もし木が地面に立ったままの状態で強度や水分量が分かれば、「これくらいの強度の材料がほしい」というときムダ無く伐採することができますし、市場で条件通りの木材を安心して買えるようになり、非常に役立ちます。

木材は極めて複雑な構造をしており、評価の因子がたくさん絡み合っているため単純に測ることはできません。私は研究者として、木材自体の性質を理解したうえで、評価技術の開発に活かせる基礎の構築を目指します。

研究者を選んだ理由

そもそも勉強があまり好きではない私が研究者の道へ進んだのは、アクシデントのようなもの。転機となったのは、大学4年で「低レベル放射能実験施設」という附置研究所に配属されたことです。フィールドワークが多く、世界各地を飛び回って水、土、空気などを集め、持ち帰ったサンプルを分析し、放射性核種がどういう状況でどのように挙動するかを調べました。たとえば琵琶湖とバイカル湖では、水に含まれる放射性核種の種類や濃度が全然違い、自分で分析した結果から事象を考察するのが面白くてたまりませんでした。

私が研究に専念するうえで非常に助けられたのは、日本学術振興会特別研究員の制度です。博士課程とポスドクの2度採用され、経済的にも安心して研究に打ち込むことができました。採用枠を拡大し、より多くの人にチャンスを与えてほしいと思っています。

私の仕事

環境中の天然・人工放射性核種の分布や濃度、挙動に関する研究や、その知識と知見を活かした環境動態研究をしています。ポスドク時代は、広島で原爆投下後に降った黒い雨の範囲を、放射性物質の組成によって特定する研究をウィーン大学で行いました。その後、広島大学助教時代から現在に至る研究テーマは、海洋の表層水・深層水の循環です。海水が循環することで地球に熱がまんべんなく運ばれますが、どのように循環しているかを調べるために放射性核種を使います。

大学教員としては、学生と一緒に研究するのがとても楽しく、共に学びながら、学生と一緒に新しい分野を開拓していければと考えています。

筑波大学 数理物質系化学域／アイソトープ環境動態研究センター 准教授

坂口 綾さん

Aya Sakaguchi

金沢大学理学部を卒業後、同大学院自然科学研究科で博士（理学）を取得。広島大学理学研究科助教、准教授を経て、現職。

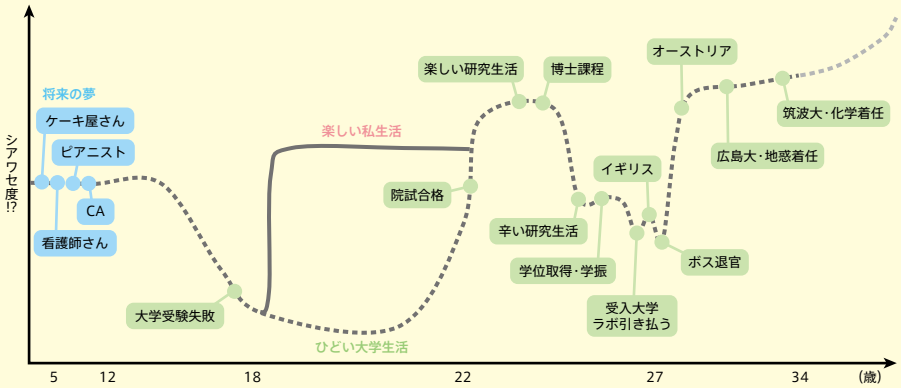
放射性核種で地球を観る

あの時のこと

世界各地でフィールドワークに熱中

これまで世界各地でフィールドワークをしてきました。大学4年生では、カザフスタンで核実験場の周囲の被ばく状況を調査。また、地球環境へのアプローチの一つとして、環境に敏感な緯度に位置するバイカル湖の堆積物を調査しました。広島大学時代は、海水の循環を調べるため東京からニュージーランドまで太平洋を縦断し、1か月半にわたって航海を続けたこともあります。私は実験室にこもるより外に出る方が合っており、とくに海に出るのは楽しみです。

マルチロードマップ

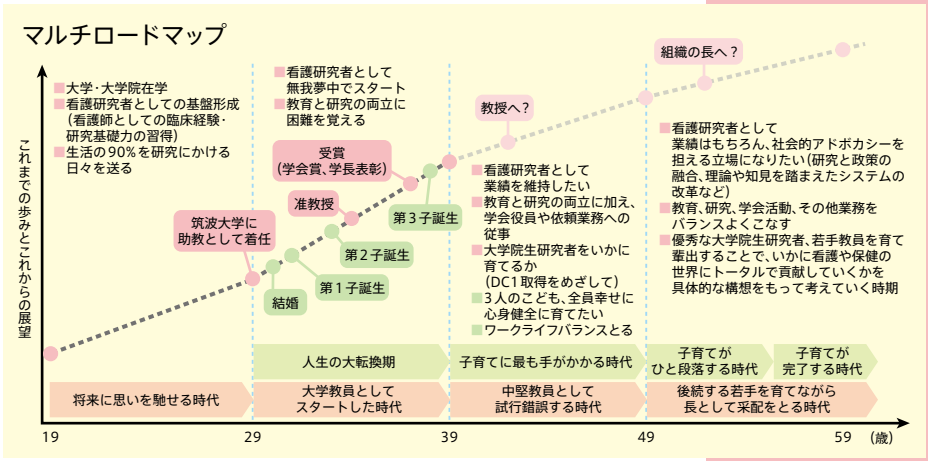


私の仕事

私の専門は「家族看護学」という新しい学問領域です。従来、医療者は患者さんを中心とし、家族を背景因子と捉えていました。しかし、たとえばお子さんが慢性疾患や障害を持つ場合、その家族はいつ闇が明けるか分からない状況が長期間続き、生活をコーディネートする力が低下してしまいます。そうした家族を1単位の看護の対象とみなして研究するのが家族看護学です。具体的には、日本の文化的背景に沿った「家族

エンパワメントモデル」を作成し、障害児を持つご家族の生活実態を調べて国際データと比較したり、障害児を在宅でみるライフプロセスを明らかにしたりしています。

もう一つ、大学教員として学生の多様な夢を実現するため、私のありうる限りのリソースを活用して学生と日々接しています。研究は決して楽しいばかりの仕事ではありませんが、教育は非常に楽しい仕事です。



子どもが元気だから全力で働ける

筑波大学 医学医療系 准教授

涌水 理恵さん

Rie Wakimizu

東京大学医学部を卒業後、同大学院医学系研究科で博士（保健学）を取得。看護師として臨床経験を積んだ後、筑波大学助教に着任。2012年より現職。

私の時間

家では子どもが最優先

家に帰ると完全に子ども中心のモードに切り替えます。「あなたたちが一番大切なのよ」というオーラを出し、メールチェック一つでも仕事の姿は子どもたちに見せません。土日は習い事に通わせていますが、その合間に、子どもたちのリクエストに応じて「お菓子作り」や「鉄棒の練習」「トランプ遊び」など童心に帰って一緒に楽しみます。こうして親子一緒の時間を大切にしています。

子育てが一段落するのは私が50歳の頃。そこから先は、夜中まで大学院生と研究談義に花を咲かせて語れるような教員になりたいと、今から楽しみにしています。

私のワークライフバランス

筑波大学に助教として着任後は、看護研究者として無我夢中で歩み始め、そこに結婚や出産が重なり、人生の大転換期を迎えました。第1子が心臓に先天的な疾患があり、1歳10カ月で手術。一番苦しい時期でしたが、職場や家族の助けを借りて何とか乗り切り、「私が働けるのは、子どもたちが健康であってこそ」という思いを強くしました。

昨年第3子を出産し、成人するまでは子育てが親としての最重要マターです。産休後に戻る職場があったのは大きな励みであり、産休中も論文を読んだり、大学院生と連絡を取り合ったりしていました。復帰後は今まで通り、大学にいる間はなりふり構わず猪突猛進し、その日すべき仕事に全力で取り組んでいます。

森林総合研究所 主任研究員

永田 純子さん

Junco Nagata

東京理科大学基礎工学部を卒業後、北海道大学大学院で博士（地球環境科学）を取得。ポスドク時代はカリフォルニア大学バークレー校などで研究を実施。現在は野生動物研究領域鳥獣生態研究室に所属。

仕事と家庭と趣味のベストバランス

私の仕事

私の専門は保全遺伝学で、大学院時代からニホンジカを研究対象としてきました。現在は、野生動物による農林業被害の防除を主要テーマとし、遺伝学的方向からアプローチしています。

ニホンジカは木の苗や樹皮、畑の農作物を食い荒らしてしまい、農林業に深刻なダメージを及ぼしています。2013年には約47万頭捕獲されましたが、生息地域は2014年度までの36年間で2.5倍に拡大し、被害に歯止めがかかりません。そこで、遺伝的な分析により、分布拡大を引き起こしている「ソース個体群」を突き止めようとしています。ソース個体群をコントロールすることにより、農林業への被害を食い止めるのが狙いです。さらに、全国的なニホンジカ遺伝マップの作成にも取り組んでいます。これにより、科学的根拠に基づいた広域管理を実現したいと考えています。

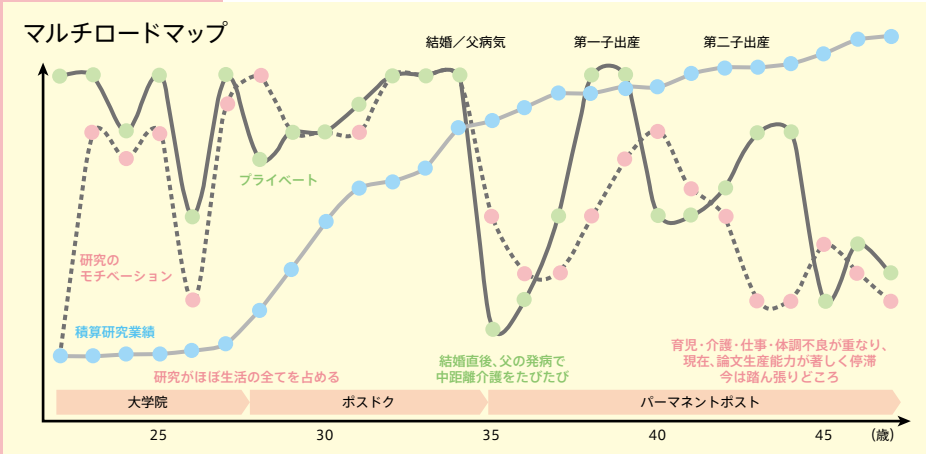
私のワークライフバランス

ポスドク時代、日本学術振興会特別研究員に採用されカリフォルニア大学バークレー校で2年間研究をしました。公私ともに英語漬けで過ごそうと、住まいはハウスシェアを選択。充実した研究をし、苦手な英語を克服し、しかも伴侶と出会うこともできました。結婚後は日米で離れて生活する年月が長く、父の介護、2人の子どもの育児、自分の体調不良、仕事への焦りなどが重なって、心のバランスを大きく崩してしまいました。しかし、趣味を楽しんだり、友人のママさん研究者と悩みを共有したりするなかで徐々に回復。今はつくばに住む生物学者である夫が、「論文執筆や研究の進め方など、いくらでも力になる」と力強い言葉で励ましてくれています。

私の時間

マウンテンバイクで元気回復

私は中学・高校と陸上に打ち込み、走り幅跳びでオリンピック出場を夢見ていましたが、怪我で断念。その後、新たに始めたのがマウンテンバイクです。大学院時代は、週末にクロスカントリーレースに出場するのが楽しみでした。現在も週末は必ずと言っていいほどマウンテンバイクで走っており、レースにも出場しています。気持ちがもやもやしたときは、ペダルをこいでストレス発散。私にとってマウンテンバイクは単なる趣味を超え、精神的な支えとなっています。



私の仕事

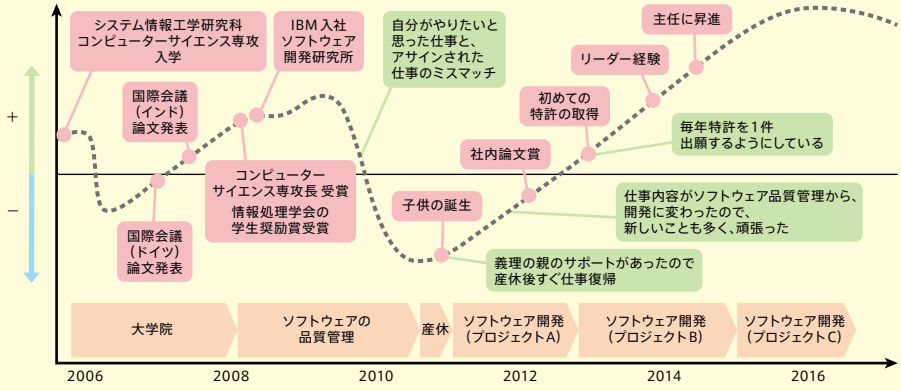
私が担当している製品は、主にアメリカで使われているソフトウェアです。米国においては、e-Discovery（電子証拠開示）に関する法案があり、企業は電子メールや社内資料の保存、提出が義務付けられています。e-Discovery（電子証拠開示）制度に基づき、法廷に提出すべき資料を検索したりタグをつけたりするソフトウェアの、ユーザー・インターフェースの開発をしています。

入社以来ずっとこのソフトウェアに携

わっていますが、当初与えられた役割は品質保証でした。その仕事に責任を持って取り組む一方で、「自分の仕事が目に見える形となる仕事がしたい」という希望を持ち続け、2年後に念願かなってソフトウェア開発の担当となりました。

現在は、アメリカと日本で週2～3回電話会議を行い、アメリカ人エンジニアと一緒にソフトウェア開発を進めています。日米のチームで働くのはとても楽しく、製品化が実現したときは達成感に包まれます。

マルチロードマップ



時間も場所も自由なワークスタイル

日本IBM ソフトウェアエンジニア

文 連子さん

Lianzi Wen

群馬大学卒業後、筑波大学大学院システム情報工学研究科で修士号を取得。日本IBMに入社し、SW & システム開発研究所（Tokyo Software & Systems Dev Lab）勤務。

私の時間

親子揃ってスキーに夢中

平日に帰宅した後は仕事のことを一切考えず、思い切り子どもと遊びます。私にとって子育ては、気分を切り替えてリフレッシュできる大切な時間となっています。週末は、夫が家事や子育てに協力してくれます。

休日の楽しみは家族でスキーに行くこと。息子は3歳からスキーを始め、体を動かすのが大好きなので大喜び。たまに保育園のお友達と一緒に行ったり、会社の福利厚生で利用できるスキー場に行ったりと、冬場は何度もスキーを楽しんでいます。

私のワークライフバランス

我が家は6歳の息子と夫の3人家族です。息子を授かったのは入社3年目で、仕事への意欲が高まっていた時期。敢えて育休は取らず、義父・義母の助けを借りて産後2か月で仕事復帰しました。

私の部署は顧客と直接会うことがないため、勤務時間がある程度自由になります。基本的に10時半から16時までは会社にいますが、それ以外はインターネットが繋がる環境であればどこでも仕事ができます。また、弊社の女性社員の35％がワーキングマザーなので、早く帰っても肩身が狭いこともありません。私は人より早く帰宅した分、子どもを寝かせた後に自宅で仕事をしています。時間や場所に拘束されないので、子育てしながら働きやすい環境ですね。

筑波大学 人文社会系 准教授

井出 里咲子さん

Risako Ide

日本女子大学卒業後、米国テキサス大学オースティン校人類学部で修士号・博士号を取得。韓国中央大学校講師、米国ヴァッサー大学客員助教授を経て、筑波大学に着任。専門は言語人類学、語用論、社会言語学。

優先順位を明確に、支えられて生きる

私の仕事

人間社会と文化を形作ることばとコミュニケーションについて、主に比較言語文化の観点から研究しています。また「すみません」や「スモールトーク」に代表される日米の挨拶、韓国と日本の言語文化の相違、ニュージーランドのマオリ語復興なども考察してきました。ことばを通して人間の社会的異同や文化の創出過程を解明するのは、感性を翻訳するようなチャレンジングな作業です。一方で、自文化、異文化を深いレベルで理解し慈しむ喜びを与えてくれます。

学会などで出会った仲間とは、雑談の意味機能の研究、子育て体験や環境についてのナラティブの日米比較なども行いました。最近では東洋的コミュニケーションの基盤を成す「場の理論」の考え方に出会い、日本人のおしゃべりによくみられる特におかしくもないのに笑い合う現象を説明しようと試みています。

私のワークライフバランス

私は2人の子どもを授かりました。会社員の夫が一緒に家事育児ができるよう、自ら仕事の形態を変えてくれました。毎晩家族で食卓を囲む夢が叶って幸せです。

数年前に乳癌を経験し、日々周りに助けられていることに気が付くとともに、物事の優先順位が明確になりました。睡眠をしっかり取る、早朝のうちに一仕事済ませる、学期が終わったら休む時間を確保する、そしてなによりも「まあ、いいか」と思う。これらは先輩研究者たちのアドバイスから体得したコツの一部です。

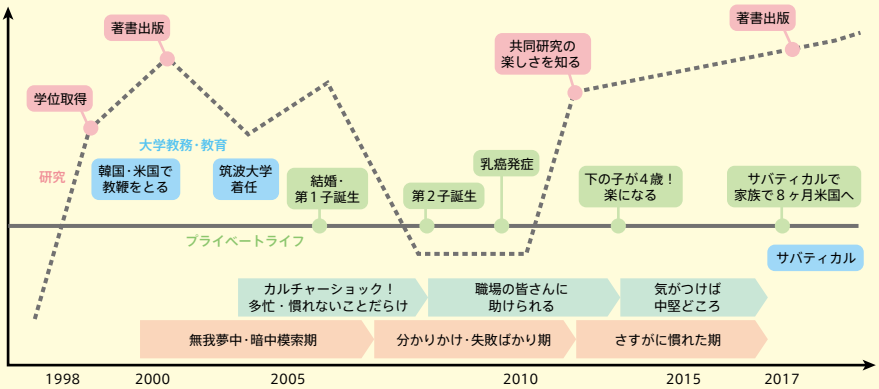
子育て期には大変なこともありますが、子どもを通して繋がる世界が増え、視野も広がります。子どもたちと夫は、心身共に私を支え、仕事を応援してくれる原動力です。

私の時間

丁寧に、面白い研究を

12年間の海外生活から戻って気付いたのは、日本社会の閉塞感、そして日本独自の人文社会学の智慧の深さと面白さです。東日本大震災の経験などを経て、日本社会は精神的成熟に向かう過渡期にいます。私自身の研究も脱皮の時期にさしかかり、何がうまれてくるか楽しみです。「競争」から「共創」へと時代を変革させる上で、世界の中での日本の立ち位置を把握し、豊かなビジョンを描きながら、丁寧に、でも面白い！と思われる研究を続けていきたいと思います。

マルチロードマップ

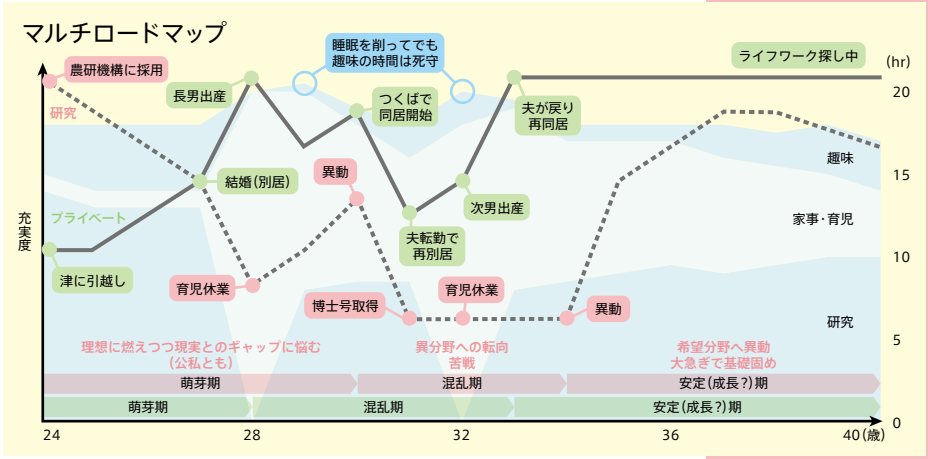


私の仕事

入所後、イチゴの品種をDNA鑑定する技術開発や、有機栽培キャベツの栄養価を調べる研究を手掛けた後、現在はリンゴの遺伝子領域を特定する仕事をしています。

リンゴの新品種を開発するには、育種に何年もの時間と広大なほ場が必要となり、極めて効率が悪いという問題があります。そこで、芽の段階でDNAを調べ、「甘い」「病気に強い」「秋に収穫できる」

などの判別を可能にしようと取り組んでいます。目標は、国内シェア1位の「ふじ」より優れた品種をつくること。私は約20項目の遺伝子領域を調べており、それが複雑にからみ合う難しさがあります。遺伝子領域が特定できても、実際に新品種として世の中に出るまでには15年から30年もかかりますが、そこに向かって一歩一歩データを積み上げていく仕事にやりがいを感じています。



研究はコツコツと、家では超プラス思考で

農業・食品産業技術総合研究機構　主任研究員

國久 美由紀さん

Miyuki Kunihisa

京都大学農学部を卒業後、同大学院で修士（生命科学）を取得。農研機構に入所し、三重県の野菜茶業研究所勤務を経て、現在は果樹茶業研究部門・品種育成研究領域に所属。博士（農学）。

私の時間

何かに没頭する時間を持つ

子どもはとても可愛くて、幸せを感じさせてくれる存在です。とは言え、仕事と育児に疲れ果てると、一つ間違えばマタニティブルーになりかねません。そういうときは、仕事と家庭以外の第3の逃げ場所を持つことが必要です。私は第1子を出産した後、赴任先の三重県の伝統工芸「伊勢型紙」という切り絵を習い、夜な夜な没頭しました。今は時間ができたので専らテニスで汗を流しています。職場でも昼休みにテニスができ、ストレスを発散しています。

私のワークライフバランス

就職活動の段階で、仕事と育児の両立を支援する制度が整っている職場を選びました。支援制度を利用しやすいことに加え、職場の雰囲気もワーキングマザーに寛容で、とても助かっています。

現在は夫と子ども2人の4人家族。何より私を支えてくれたのは、家族の明るさです。夫は私の生き方を認めてくれており、ゴミ捨てや洗濯、子どものお弁当作りまでしてくれます。それほど家事をしてもらっても、私は母としても妻としても100点満点だと自負していますし、多分夫も自分を理想的な夫だと思っているでしょう。家庭のことに関しては思い切り自己評価を高くして、プラス思考でいることが明るく生きるコツですね。

株式会社生体分子計測研究所 研究員

馬 冬梅さん

Dongmei Ma

中国の北華大学医学部を卒業し、外科医として勤務したのち来日。筑波大学大学院人間総合科学研究科で博士（医学）を取得。現在は先端計測解析センター所属。

身近な暮らしに研究成果を役立てたい

私の仕事

私は中国で外科医をしていましたが、臨床から研究にシフトすればより多くの人を助けられると考え、高度な医学研究が行われている日本に来ました。来日当初は日本語も実験手法も全然分かりませでしたが、無事に博士課程を修了。しかし実験室にこもって研究を続けるより、実際に社会で使われる研究をしたいという思いが強く、企業の研究員として働く道を選びました。

現在は、高性能顕微鏡などナノバイオロジー分野の計測装置の開発と、バイオアッセイ（機能性評価試験）の受託サービスに携わっています。受託サービスについては、機能性食品などを開発する企業の要望に添った最適な実験プランの提案を心がけています。私が試験した商品がスーパーで売られているのを見ることもあり、生活の中で研究成果が役立っているのを実感できます。

私のワークライフバランス

来日後、アルバイトをして学費と生活費を稼ぎながら大学に通っていました。博士課程1年生のときは、1日の半分がアルバイトで、残り半分しか研究の時間がとれません。しかし2年生から高山国際教育財団の奨学金を受け取ることができ、やっと研究に集中できるようになって非常に助かりました。

私は日本で結婚し、ポスドク時代に娘を出産しましたが、夫とはすぐに離婚。1年間は中国の母のもとで子育てをし、娘が2歳のとき再来日して働き始めました。ありがたいことに、すぐ保育所に預かってもらうことができ、また残業なしで帰れる職場の配慮と優しさに助けられ、仕事と育児の両立ができています。

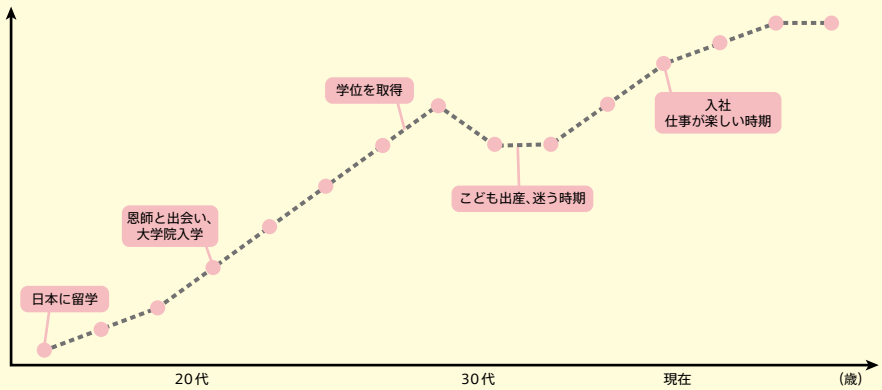
私の時間

娘と一緒に囲碁を勉強中

日本の研究者は、地位と安定した生活を手に入れた後も熱心に勉強を続けていて、その姿に感動しました。私も必死に勉強しレベルアップしていかなければと、大いに刺激を受けています。

私生活の面では、子どもがかけがえのない宝物です。子育て中は自分の自由な時間は減りますが、子どもがいるからこそ頑張ることができます。いま6歳の娘は囲碁に夢中なので、私も娘と一緒に囲碁を覚えようと悪戦苦闘しながら、娘と過ごす時間を楽しんでいます。

マルチロードマップ



単身赴任で研究し、基準値の見方を発信

産業技術総合研究所 主任研究員

小野 恭子さん

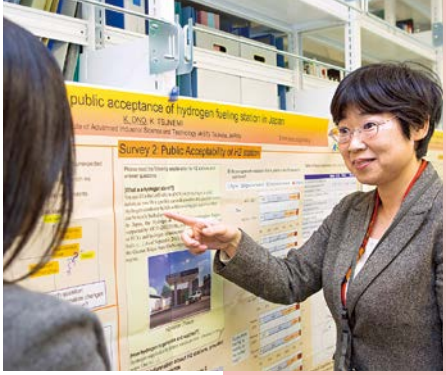
Kyoko Ono

東京大学工学部を卒業後、同大学院工学系研究科で博士（工学）を取得。産総研に入所し、化学物質リスク管理研究センターを経て、現在は安全科学研究部門排出暴露解析グループに所属。

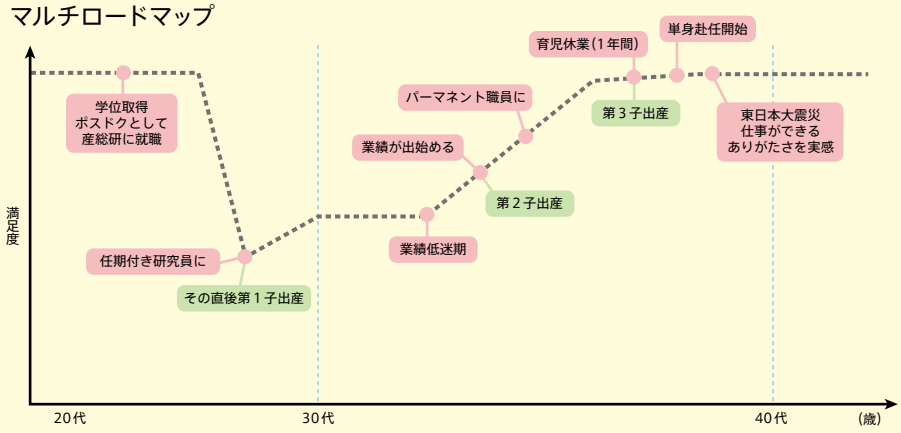
私の仕事

博士号取得後、化学物質のリスク評価研究を始めました。大気、水、土壌がどれくらい汚れると、ヒトの健康や環境にどのような影響を及ぼすのか、とくに重金属の利用と規制に興味があります。また、例えば最先端技術について、ヒトへの危険や環境汚染の恐れがないか、便利さと安全のバランスが取れた管理方法も研究しています。

東日本大震災を機に、私の仕事への姿勢は一変しました。放射性物質の線量で社会が混乱するのを見て、専門家が情報を発信することの大切さを実感し、日本リスク研究学会の仲間とともに『基準値のからくり』という本を執筆。基準値との向き合い方を、高校生にも分かるように伝えています。基準値は一旦決まると権威を持ってしまいますが、技術の進歩や社会の変化に応じて見直していくことが大切です。



マルチロードマップ



私の時間

週末はお寺のお嫁さん

現在、家族は山形で暮らし、私がつくばに単身赴任しています。夫はお寺の住職をしており、私は毎週末にお茶出し、電話番、住職のスケジュール管理などお寺の仕事を手伝っています。平日は夫と義母が子育てをしてくれており、週末私は学校行事に参加するほか子どもたちとべったりすごしています。また山形県は女性の就業率が非常に高く、みんな良く働きます。そういう土地柄もあって、檀家さんたちも私が単身赴任で働くことを応援してくれています。

私のワークライフバランス

私には子どもが3人います。第1子が1歳のとき、夫が海外に留学しました。1人で子育てをしましたが、職場の上司の理解と、つくば市の子育てサポートには随分助けられました。仕事と子育ての両立は大変ですが、マネジメントの技はあるものです。たとえば「子どもが熱を出したときはどこに電話をかけるか」など、非常事態マニュアルを作り、普段から頭の中を整理しておくのもその一つです。

平日家族に電話をかけると子どもが私を気遣って優しい言葉をかけてくれますし、山形に帰ると「大好き」と抱きついてきます。毎週帰省するたびに、家族の大切さを実感しています。

エーザイ株式会社 主幹研究員

三橋 薫さん

Kaoru Mitsuhashi

九州大学大学院理学研究科修了。(株) ジェノックス創薬研究所を経て、エーザイ (株) 入社。入社後に九州大学大学院で博士 (理学) を取得。現在はhhcデータクリエーションセンター所属。

目標を持って学び、働くよろこび

私の仕事

薬やその元となる化合物が、どのような作用を持っているのか、また細胞レベルで何が起こり病気の治療につながるのかを、分子生物学的な手法を用いて解析しています。入社後しばらくは、モデル生物である出芽酵母を用いた研究をしていました。その後、哺乳類細胞でも遺伝子のノックアウトや改変ができるようになり、全ゲノム解析や1細胞の解析もできるようになるなど技術は大きく進歩。それに伴い、私たちも新しい手法を取り入れながら解析を進めています。製薬会社の研究者として、患者様に安心して使っていただける良い薬を届けることが最大の目標です。

2011年には経営職 (マネージャー) に登用されました。研究の面では自らの提案に沿って進められる立場となり、そこに組織のマネジメントを考える役割も加わり、仕事の幅が広がっています。

私のワークライフバランス

研究を続けるうえで博士号を取得した方が良いと考え、入社2年後に博士 (理学) を取得しました。その準備期間は、プライベートで空いた時間のほとんどを費やして集中的に取り組みました。

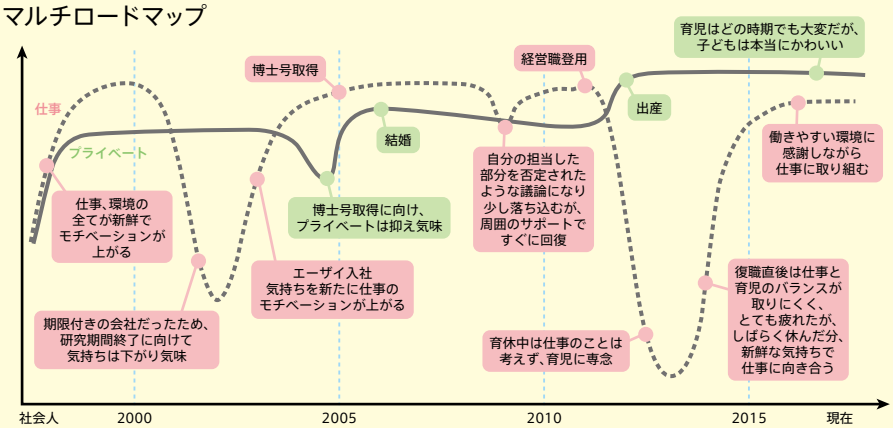
結婚して子どもを授かってからは、夫と2人で子育てをしています。仕事と家庭のバランスを取るには、自分一人で何もかも抱え込まないことがポイント。子どもが病気のときは夫と私が交代で休みを取るなど、あらゆる面で夫の協力に支えられています。また、職場には仕事と育児を両立している研究員も多く、急に休んでも快くサポートをしてくれます。子育てに関する同僚との情報交換もとても役立ち、恵まれた職場環境に感謝しています。

私の時間

家族仲良く過ごす幸せ

平日は、電車通勤の40分間が仕事と子育てのモードを完全に切り替える貴重な時間となっています。週末は、子どもが親子3人揃って出かけるのを楽しみにしていて、「今日はどこ行く？」と毎週必ず聞かれます。出かける先は近くの公園やショッピングセンター、鉄道博物館など。特別なことはなくても、家族が元気で仲良く暮らしていければ言うことはありません。子どもが大きくなって自立しても、程よい距離感で仲良く過ごしていければと思っています。

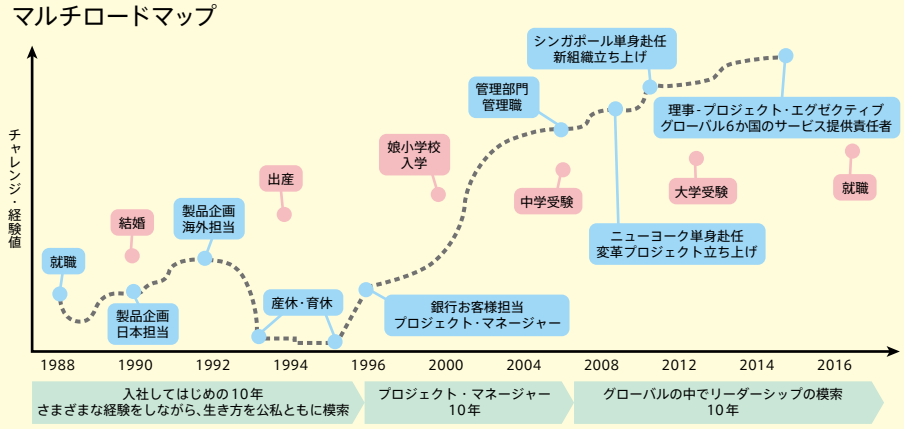
マルチロードマップ



私の研究テーマ

私が担当しているプロジェクト・エグゼクティブの役割は、担当するお客様のビジネスの成功を常に考え、ビジネスパートナーとして何ができるのかを追求することです。お客様の期待に応えるため、日本のみならず海外のメンバーも含めてIBMチームの力をフルに活かし、課題に対する解決策を策定します。そこでは、お客様の会社はもちろん、お客様のお客様である社会の変革まで生み出していくことが求められます。たとえば、成長分野のビジネス領域では売り上げを伸ばしていくためのご提案を、安定したビジネス領域ではコスト削減のご提案を、といったように、お客様の事業展開における優先順位を見極め、変革をお手伝いする最適なご提案を差し上げます。このように、IBMの最新テクノロジーや、国際的な規模のITサービスを提供することでお客様の目標を達成し、さらには広く社会に貢献することに大きなやりがいを感じています。

マルチロードマップ



管理職だからこそ自分らしく振る舞える

日本IBM 理事 シニア・グローバル・プロジェクト・エグゼクティブ

浅川 恵理さん

Eri Asakawa

筑波大学自然学類数学専攻を卒業後、日本IBMに入社。研究開発部門のシステムエンジニア、プロジェクト・マネージャーを経て現職。グローバル・テクノロジー・サービス事業クロス営業本部所属。

私らしい道

グローバル社会でいかに生きるか

家庭と仕事のバランスをとりながら生きてきた30年を過ぎ、今後はまた別の新しいステージの30年を考えています。これからは、「グローバルに戦えるリーダーになる」という目標にチャレンジしながら、国際社会の中で自分の立ち位置を確立していきたいと思います。一方、プライベートでは、ピアノを弾くことを楽しんでおり、毎年の演奏会に向けて、大曲1曲を1年かけて仕上げています。このように、チャレンジと趣味のバランスを取りながら、"自分らしさとは何か"を追求していきます。

私からのエール

「管理職＝責任が重くなる」のではなく、「自分らしく振舞うことができる」と捉えています。より高いポジションにつけば裁量や権限が拡大し、仕事を動かしやすくなるとともに、仕事と家庭のバランスも取りやすくなります。私の場合、共働きのため最初は義父・義母に子育てを助けてもらって仕事に集中し、中学受験の際には勤務時間が安定した管理部門に移り娘のサポートをしました。管理職だからこそ、先の計画を立てて時間をコントロールすることができます。

その後、再び家族の支援を得て海外赴任し、国際舞台でリーダーシップをとるという貴重なチャレンジをすることができました。迷ったら、まず飛び込んでみる。その選択を積み重ねて今日があります。

農研機構食品研究部門 食品健康機能研究領域長

山本(前田)万里さん

Mari Maeda-Yamamoto

千葉大学大学院園芸学研究科修士課程を修了後、農林水産省に入省。農業研究センター、中国農業試験場、野菜・茶業研究所等を経て2012年より現職。博士(農学)。

商品開発にチャレンジ「念ずれば花開く」

私の研究テーマ

私が長年取り組んできたのは、抗アレルギー作用の研究です。静岡の野菜・茶業試験場への転勤を機にお茶の仕事をスタート。お茶に含まれるメチル化カテキンという成分が抗アレルギー作用を持つことが分かり、その成分を多く含むお茶が「べにふうき」であると突き止めました。そのとき私の胸中にあったのは、「基礎研究だけではなく、絶対に商品化までこぎつけたい」という強い思いです。ちょうど研究成果移転型兼業制度の第1号に採用され、4年間アサヒビール(株)に兼業勤務しました。企業は緻密な将来予測に基づき、あらゆるリスクを想定して商品

化を決定するため、簡単にはいきません。私は、エレベータ内で社長への突撃プレゼンを決行。ご理解を示してくださり、商品開発が一気に加速しました。関わってくださった多くの皆様に感謝しています。

私からのエール

「べにふうき」を発見した頃は、第2子が誕生し、大型国家プロジェクトのリーダーを務め、毎年1か月の海外研究を行うなど多忙を極めていました。しかし同居の義母をはじめ、周囲に助けられて何とか乗り切ることができました。家族は私の仕事に対して「楽しそうにやっているからしょうがない」と見守ってくれていたように思います。

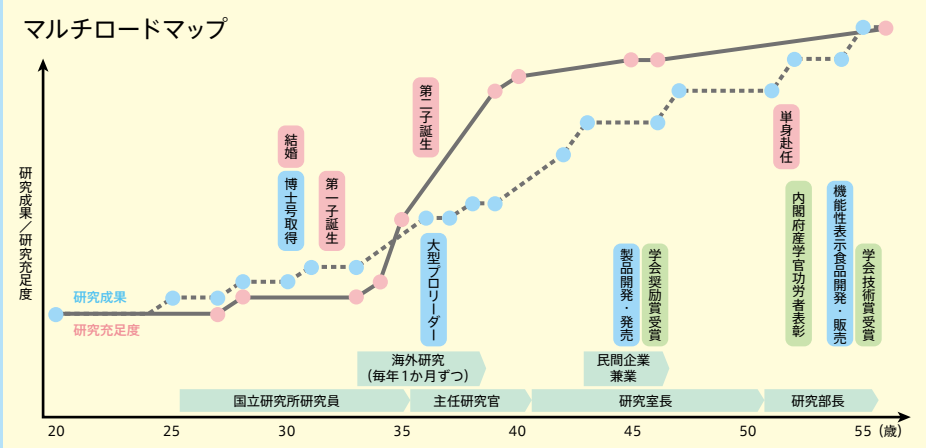
2012年に食品健康機能研究領域長を拝命したときは、夫に相談する前につくばへの単身赴任を即断。現在はお茶だけでなく、農研機構内のすべての機能性研究を取りまとめる立場となり、外に向けて発信する機会も増え世界が広がりました。研究も続けていますし、管理職も楽しんでいます。

私らしい道

商品化のプロセスを楽しむ

2015年4月に機能性食品の表示制度が新たに施行され、研究成果を活かした商品開発が勢いを増しています。一番わくわくするのは、商品が完成するまでのプロセス。私が大切にして来た言葉は「念ずれば花開く」で、諦めずに絶対できると信じて取り組んでいる課程が好きなのです。現在も「次にどういう商品を開発するか」が最大関心事で、いろいろな企業と話を進めています。今後も“食と健康”に何らかの形で関わり続けていくつもりです。

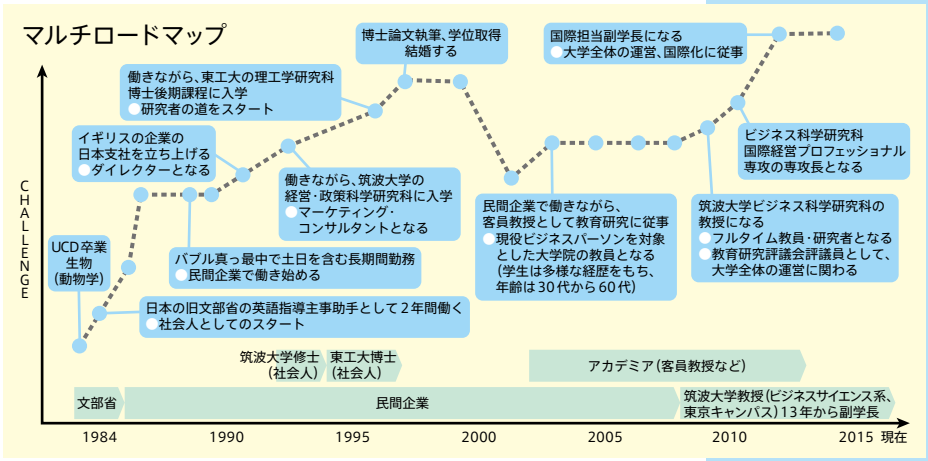
マルチロードマップ



私の研究テーマ

私は日米を行き来しながら育ちました。アメリカの大学を卒業し、日本で就職。文部省（当時）の英語指導主事助手となり、教育の楽しさに目覚めました。その後、民間企業で仕事をするなかで経営学を学ぶ必要性を感じ、働きながら大学院に通い修士号、博士号を取得。興味のある分野を追究するのが面白くなり、今度は働きながら早稲田大学や英国国立ウエールズ大学経営大学院（日本語）プログラムの客員教授を務め、研究や論文執筆、書籍の執筆などに精力的に取り組みました。

2008年に筑波大学教授に着任し、2013年には国立大学唯一の女性・外国人副学長に就任しました。現在は副学長としての仕事とともに、「グローバルリーダーシップ」「ナレッジマネジメント」の2つの研究プロジェクトに関わり、ビジネスパーソンの国際比較など、楽しく研究も進めています。



変化や多様性を恐れず自分を成長させよう

筑波大学 副学長・理事（国際担当）

キャロライン・ベントンさん

Caroline F. Benton

カリフォルニア大学デービス校文理学部卒業。来日後、民間企業等で働きながら筑波大学大学院で修士（経営）、東京工業大学大学院で博士（学術）を取得。筑波大学ビジネス科学研究科教授、専攻長を経て現職。

私らしい道

国際的プレゼンスをあげるために

国際担当の副学長として、筑波大学の国際的プレゼンスを上げるのが私の責務です。筑波大学は国立大学の中でも留学生の比率が高く、国際化が最も進んでいます。今後も、国際的なパートナーシップを拡大するための戦略を立て、海外との共同研究を進展させていきます。また、留学生の受け入れを通して、世界中に日本を好きな若者を増やすのが目標です。私自身、さまざまな国を訪問する機会が増え、各国の方々とともに仕事ができることは大きな喜びです。

私からのエール

私はこれまで、怖がらずに次々と新しいことにチャレンジし、さまざまな経験をしてきました。いま、私から若い皆さんに伝えたいのは、社会の変化や多様性を恐れず、絶えず自分を成長させてほしいということです。20年後には、現在ある職種の4〜5割が無くなるという統計があります。もちろん自分の専門性を持つことは大切ですが、広い視野とフレキシビリティを持って何にでも挑戦していく逞しさがなければ、生き抜くことが難しい世の中になるでしょう。同時に海外との関係がますます重要になっていくため、習慣や価値観の違いを乗り越えて海外とコラボレーションし、Win-Winの関係をつくる能力が必要です。

アサヒビール株式会社 製品保証センター所長 理事

山岸 裕美さん

Hiromi Yamagishi

千葉大学薬学部を卒業し、アサヒビール（株）に入社、研究所に配属。醸造研究所微生物技術部部長を経て現職。東京大学で博士（農学）を取得。

酵母の研究から品質保証へ 世界が広がる面白さ

私の研究テーマ

入社から25年間、ほぼビール酵母の研究一筋で歩んできました。スーパードライの酵母には、多分社内で一番長く付き合っています。酵母は生き物であり、とても個性豊か。酵母が働きやすい環境を整えると美味しいビールができますが、酵母の個性（特徴）をどう引き出すか、その技術開発はビール醸造の要であり、非常に面白い研究です。私は研究を実用に役立てながら、研究成果を蓄積し博士号を取得することができました。また、社会のあらゆるところで自分の関わった製品を見られる喜びもあります。

現在は、品質保証のための分析をする部署を統括する立場です。新商品が増えると、たとえば「糖質ゼロ」を保証するための分析が必要になるため、分析のための技術開発も担っています。仕事の範囲が広がり、これまでとは違う人脈も広がっています。

私からのエール

私には子どもが3人いますが、子どもが増えるに従い子育てが楽になっていきました。徐々に会社の支援制度が充実し、私自身も母親としての経験を積んでいったからです。とくに第3子誕生の頃は研究が非常に面白く、公私共に充実していました。

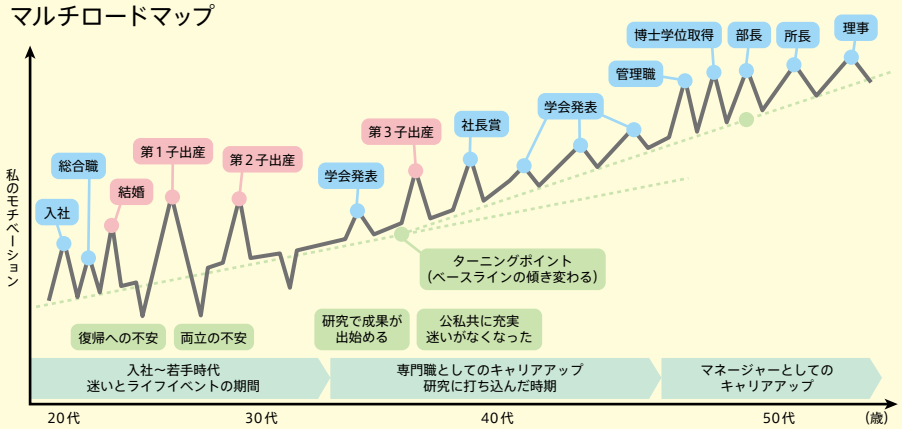
改めて研究員時代から現在までを振り返り、大切だと思うポイントがいくつかあります。1つめは、人それぞれ状況や価値観が違うので、人と比べないこと。2つめは、子育て中は時間の制約がありますが、働きたい気持ちを持ち続けること。3つめは、女性管理職として行動や発言の影響力を意識することです。今後、社内にロールモデルが増え、女性管理職が育ってくれることを願っています。

私らしい道

研究マネジメントのステージへ

部長に昇進した直後は、大好きな実験ができないことにショックを受けましたが、すぐにチームで研究する喜びを感じ、今までより多くの仕事をスピードをあげてできるようになりました。現在は、研究マネジメントから組織マネジメントへと役割が変わり、未知の世界に飛び込んで興味の対象が広がっています。ここで私にどんなことができるのか、もっと世界を広げていきたい、社内でもっといろいろな仕事を経験したいという意欲が沸いています。

マルチロードマップ



看護や助産の面から女性をサポート

茨城県立医療大学　保健医療学部　教授

加納　尚美さん

Naomi Kano

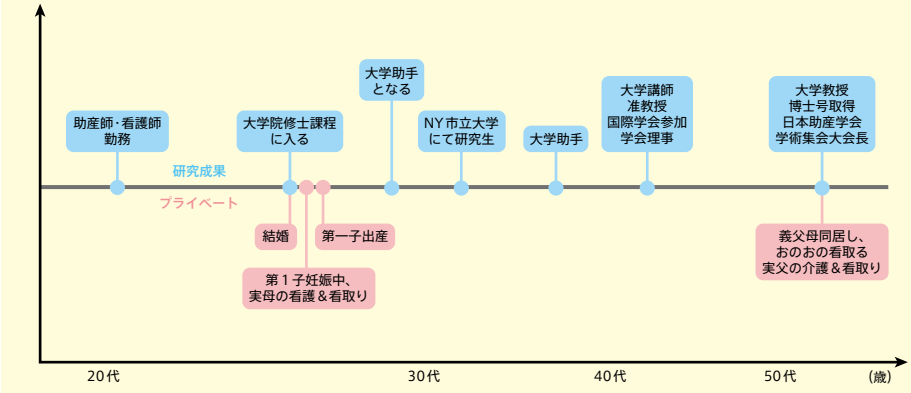
新潟大学医療短期大学助産学専攻科修了。千葉大学で修士（看護学）、筑波大学で博士（学術）を取得。看護師・助産師として臨床経験を積んだ後、看護師・助産師教育に携わる。

私の研究テーマ

私は助産師の仕事を通じて、多様な研究テーマや活動テーマと出会ってきました。修士論文のテーマは、産婦を一人にしない継続的なケアの効果について。これは、当時としては画期的なランダム比較試験（RCT）の手法を取り入れた臨床研究です。その後ニューヨーク市立大学で、日米の助産師活動の比較研究を実施。これを機に助産師教育に興味を持ち、帰国後は大学教員の職に就きました。

一方、女性の出産環境について強い問題意識を持って臨床に関わる中で、性暴力被害者支援が重要な研究テーマとなりました。23年前に研究に着手し、勉強会の開催、NPO法人「女性の健康と安全のための支援教育センター」設立、「日本フォレンジック看護学会」設立など、継続的に活動。暴力と虐待の防止とケアを目指し、実践と研究を積み重ねています。

マルチロードマップ



私らしい道

たくさんの目標に向かって邁進

今後の目標は、大学内での役割から看護や出産に関することまで、大きく4つあります。1つは、大学に多職種連携教育を定着させるための仕組みづくりと人材育成です。2つめは、多様な看護職が地域社会で活躍する仕組みづくり。3つめは、日本フォレンジック看護学会の活動を軌道に乗せること。4つめは、女性が生き生きできる妊娠・出産経験と社会のサポートのあり方について、未来に向けてのシミュレーションを描き始めたところです。

私からのエール

私はキャリア志向ではなかったと思います。どちらかというと周囲と競争するのではなく、誰もやっていないことや自分が好きなことを、かけがえのない出会いを通じてやってきました。とくに性暴力被害者支援については、被害者と向き合った看護師から相談されたのがきっかけです。その後地道にこの問題に取り組み国内外の方々とつながりができました。その中に、北米でのフォレンジック看護学がありました。この20年間に性暴力被害者支援の活動は大きく広がり、現在では日本フォレンジック看護学会の理事長を務めています。その間、2人の子どもの母親として子育てを最優先としなければならない時期もありましたが、論文執筆や海外出張など、家族に助けてもらいながら仕事の幅を広げてきました。

私の研究テーマ

大学時代から現在に至るまで、耐熱金属材料の研究に携わってきました。現在グループリーダーを務める耐熱材料設計グループでは、耐熱性の高いチタン合金や、高温で動作する形状記憶合金などに着目して研究を進めています。金属材料というのは、高温で長時間使われている間に劣化したり、表面に酸化物（錆）がでたりしてしまいます。そのような現象をどうコントロールするかが非常に難しくもあり、研究の醍醐味でもあります。

現在は、エネルギー構造材料分野の分野コーディネーターとして複数のグループをまとめ、また副拠点長として拠点全体の運営に関わり、さらに大型研究プロジェクトのリーダーを務めるなど、さまざまな役割を担っています。大変なことも多々ありますが、今まで知らなかった世界を見て新しい経験を楽しもうと思っています。

私からのエール

私には子どもが2人いますが、出産の時期は意外とアクティビティが落ちませんでした。なぜならその時期は、研究所にいる間は研究だけに専念していられたからです。研究以外の仕事が増えることの方が、実は大変だと言えます。それでも私は「オファーのあった仕事は断らない」という姿勢を貫き、職場では労働組合の委員長、男女共同参画チーム長、プライベートでは学童保育の時間延長運動など忙しく飛び回ってきました。それは、人を助けることによって自分も助けてもらうことができる、また自分自身が成長できると考えたからです。こうした経験があるので、研究以外の管理職の仕事にもあまり抵抗はありません。

物質・材料研究機構 構造材料研究拠点 副拠点長

御手洗 容子さん

Yoko Yamabe-Mitarai

東京工業大学金属工学専攻を修了し、博士（工学）を取得。日本学術振興会特別研究員（マンチェスター大学）を経て、金属材料研究所（当時）に入所。2016年より現職。

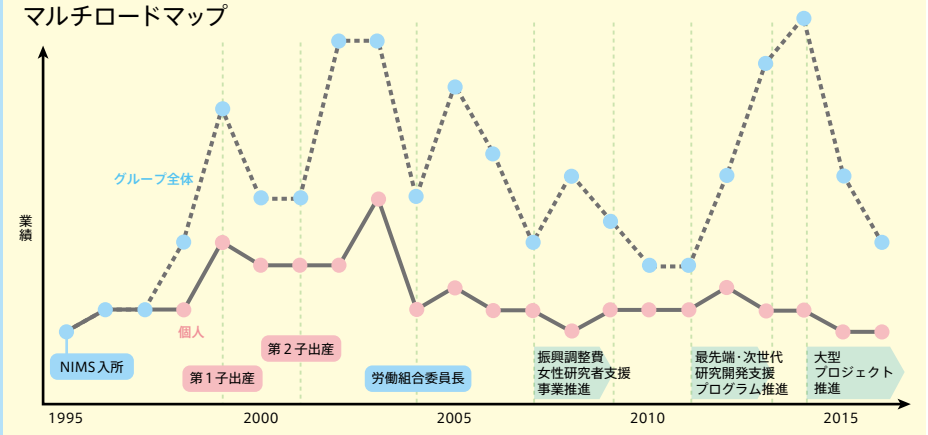
研究以外の仕事もいつか自分の役に立つ

私らしい道

続けられる限り研究を続けたい

定年までの残り10年で、今まで以上に研究成果をあげていきたいと強く思っています。この先、自分が本当にやりたい研究テーマで大型プロジェクトを動かせたら、それが研究者として一番幸せなことです。周りには70歳まで研究を続けている方がたくさんいますので、私も続けられる限り研究を続けていくつもりです。ただし、いまは現役研究者として目の前のことに精一杯取り組んでいる最中のため、先のことを考えるのはまだこれからです。

マルチロードマップ



企業勤務から子育てまで すべての経験を研究の糧に

筑波大学 グローバル教育院ライフイノベーション学位プログラムリーダー
筑波大学 生命環境系／北アフリカ研究センター 教授
産業技術総合研究所触媒化学融合研究センター クロスアポイントメントフェロー

礒田 博子さん

Hiroko Isoda

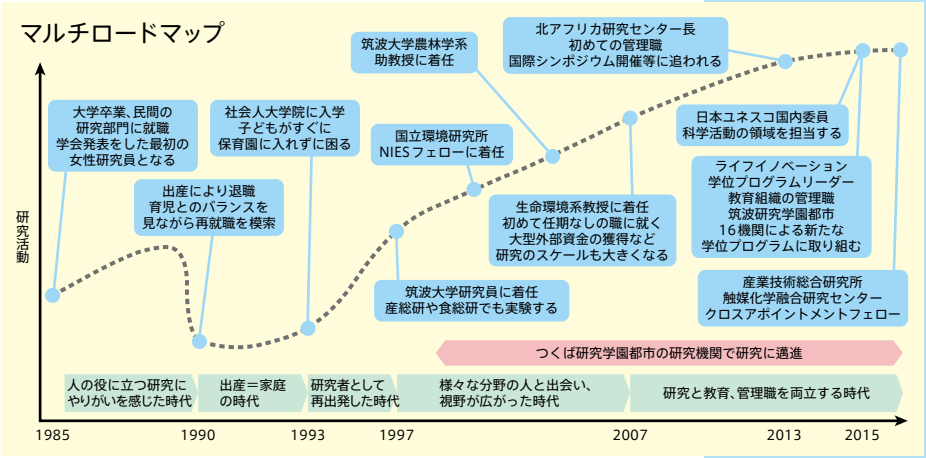
筑波大学を卒業後、雪印乳業（株）研究職を経て、同大学院で博士号を取得。
国立環境研究所フェロー、筑波大学北アフリカ研究センター長などを経て現職。

私の研究テーマ

私は雪印乳業（株）で粉ミルクの基礎研究を行い、3つの新商品開発に関わりました。後に自分が出産したとき、偶然にも栄養士さんが手にしていたのはその粉ミルク。「自分たちの研究が、こうしてユーザーにつながるのだ」と実感できる貴重な体験をしました。

筑波大学では生命環境系／北アフリカ研究センターに所属し、食品や薬用植物

が持つ健康機能の解析と、その有効利用について研究を続けています。特に、地中海の乾燥地に生育する植物には、過酷な環境を生き抜くための機能が備わってお



り、現地の伝承的な薬効を科学的に裏付ける機能成分を明らかにしてきました。現在は教授として研究室を運営する立場となり、研究資金を継続的に獲得するのが重要な役割。これまで多様な経験をしてきたすべてが、管理職の仕事に役立っているように思います。

私らしい道

研究を社会に橋渡しするのが夢

私は企業の研究職を経験したこともあり、研究というのは論文だけに留まらず、社会に貢献できるようなものでありたいという強い思いを持っています。「食薬」（食や薬草）の研究をしているので、将来的にはそれが機能性食品や創薬のシーズになることを目指し、企業と積極的に連携していく考えです。アカデミアの研究者としてエビデンスを蓄積し、それを社会に橋渡しするのが私の役割であり、開発した製品を社会に送り出すのが私の夢です。

私からのエール

子育てと仕事の両立に悩むことがあっても、研究が好きなら絶対に続けられます。私の場合、家事が意外と良い気分転換となり、洗い物をしたり掃除機をかけたりしているときに研究のアイディアが浮かぶこともありました。そうした経験を踏まえ、若手研究者には、子育てに集中する時期を大切にしつつ、研究をやめずに続ける努力をしてほしいと話をしています。特につくばは研究機関が多く、研究を続けていればどんどん次につながる恵まれた地域です。女性研究者の世界でもダイバーシティが推進されるなか、今後さらに子育て中の研究者をエンカレッジする風潮が高まり、女性の研究者や管理職が増えることを願っています。

私の研究テーマ

私は1970年代に、女子大生就職氷河期に外国航空会社に客室乗務員として就職しました。近年、男女同一賃金、残業の抑制などが声高に叫ばれていますが、私の職場では当時から、同一労働同一賃金、企業による休暇保証、専門職制度、フレックスタイム、社内公募制など制度が整い、働きやすい環境でした。1990年代に、上級管理職はMBAを取得するよう全社的に奨励があり、社会人大学院に入学。改めて経営学を学ぶと、会社の方針や上司の指示がどのような根拠に基づくものかが分かり、会社の戦略への理解も深まりました。

出典：(株) リクルートの雑誌取材より

やがて小泉政権時代に観光立国宣言があり、大学で実務家教員が必要とされたのを受けて着任。大学での職業教育が重視されるなか、実務経験と研究成果を講義に活かせるので、非常に良い機会を与えていただいたと受け止めています。

私からのエール

私が長年働き続けてくるなかで、状況判断を求められる場面で臆せずチャレンジしてこられたのは、若い時期に海外生活を体験して多様な価値観を理解したからだと思います。アメリカ留学や、中近東を車で走破しベドウィン（遊牧民）の生活を見たこともあります。異文化にふれると自分の引き出しが増え、広い視野にたつと度胸もすわり、謙虚にもなります。皆さんには、若い時に異文化を体験してほしいですね。それが日本を知り、自分を知ることになります。もはや英語やICT技術は必須の基本能力であり、その上でロジカルにものを考え、相手の意見を尊重しながら自分の意見をしっかり伝えられる能力を養うことが必要です。

筑波学院大学 学長・教授／筑波技術大学 監事

大島 慎子さん

Chikako Oshima

米国留学後早稲田大学卒業。ルフトハンザドイツ航空客室乗務員、広報室長を歴任。社会人として大学院で国際経営学修士、博士課程へ。筑波学院大学教授を経て学長。

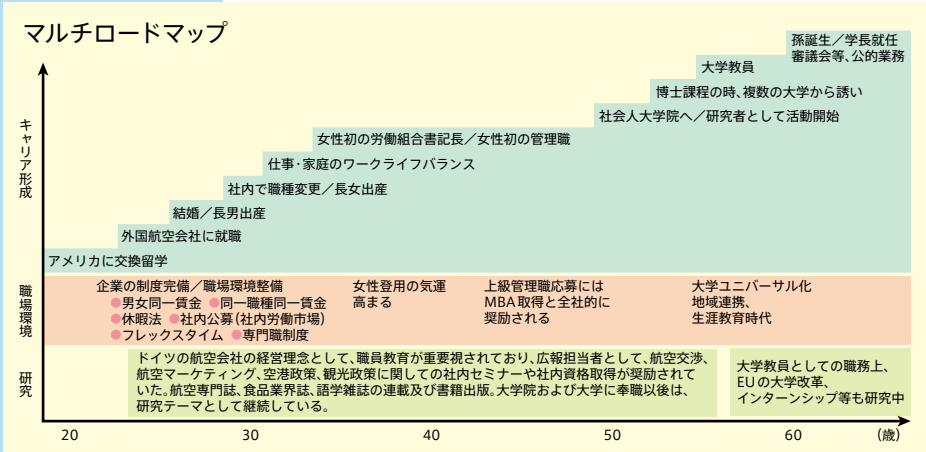
日本と自分を知るために若いときに世界を見よう

私らしい道

国際的な視野で学生を育てる

2013年から毎年、エラスムス計画（EUの大学が学制を統一し、交流を促進する取り組み）に協力し、フランクフルト大学の国際週間で授業をしています。これは世界中から講師を招聘して英語で専門分野の授業を学生に受けさせるという、取り組みです。今後については、地域の生涯教育の拠点としてバランスの良い大学運営を行うこと、学生および若い世代には、異なる価値観を積極的に理解し、協調する態度、また社会に対して自分の役割を明確に理解する人材に成長してほしいと考えています。

マルチロードマップ



イノベーション創出へ
女性研究者・技術者の潮流を起こす

～「多世代に渡る女性研究者・技術者のシームレスエンカレッジモデルの実現」を目指して～

●モデレーター

麓 幸子
日経BP社 執行役員
日経WOMAN元編集長

●話題提供

溝上 智恵子
筑波大学 教授

●パネリスト

稲垣 敏之
筑波大学 副学長

倉島 菜つ美
日本IBM 技術理事

庄司 一子
筑波大学 学長特別補佐

富樫 茂子
産業技術総合研究所 理事

パネルディスカッション

女性研究者・技術者とイノベーション創出
～組織として克服すべき課題とアクションは何か～

組織における課題とアクション

溝上　午前中は46名の参加者でプレセッションを行いました。話題提供として、ここから見えてきた課題とアクションを報告します。

課題は大きく分けると3つありました。一つ目は「意識」。社会の固定観念や女性

自身の意識です。二つ目は「働き方」。時間の使い方（ワークライフバランス）や、出産育児介護などのライフイベントをどう両立するかということです。三つ目は「育成」。若手から育成を行ったり多様なロールモデルを身近に増やしたりし、母数を増やしていこうということです。

これに対するアクションですが、まず、「固定観念への挑戦」がありました。数をある程度固めて、新しい価値観を浸透させていこうという意見です。また、大学などでは評価という文化が未成熟なのでIBMなどのすでに経験持つ企業の例を参考に、「柔軟な組織と評価」のシステムを構築していく必要が検討されました。その上、ダイバーシティをトップの層が「成長戦略として意識」しなくてはならないという意見もありました。なおかつ、優秀な人材を若い時からリーダーとして位置付けることが重要だと考えられます。このほか「頑張りすぎないロールモデル」も大切との声もありました。子どもたちに働くことを楽しんでいる姿を見せ、中高生からの女性研究者育成を行っていくのです。そしてその先に相互に支え合うネットワークを構築する必要性も話し合われました。

麓　これを受けてのコメントを、それぞれ簡単な自己紹介を含めてお願いします。

稲垣　総務・人事を担当しています。筑波大学の人事の特徴は、本部主導で行うものがあることです。女性研究者増を目指すための枠を用意できたりするので、ダイバーシティは進めやすいと言えます。

女性が働く環境の整備では、個人情報

平成28～33年度 文部科学省 科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」シンポジウム

日時　平成29年1月27日（金）
会場　日本アイ・ビー・エム株式会社

主催：国立大学法人 筑波大学、日本アイ・ビー・エム株式会社、
　　国立研究開発法人 産業技術総合研究所
共催：つくば女性研究者支援協議会

筑波大学第10回全学FD研修会

を扱うことを前提としたテレワークをどのように進めるかが課題です。現在、導入候補システムを稼働させながら実証実験を行っています。

庄司　一昨年の3月までダイバーシティ推進室長として企業にも協力を仰ぎながら拠点型のダイバーシティに携わっておりました。その時、違う文化に触れ協働すると、違う価値観に気づいたり、まったく新しいものが生み出せたりするということを強く実感しました。

　これまで、自分だけ女性という場をいろいろと経験した中で、言いたいことを言いにくいと感じたこともありましたので、数を増やすことも大事だと思います。また、男性との仕事場は競争モードになりがちです。互いに切磋琢磨することはいいことですが、女性が増えることで、共生、協働といった異なるモードも生まれるといいと思います。

富樫　産総研でダイバーシティ推進を担当しています。研究者になって40年以上が経ちますが、研究は、女性、男性関係なくとてもやりがいのある仕事です。私たちが目指すのは、人々の暮らしを豊かにする産業の発展を通じて持続可能な社会を作ること。けれどもこれを達成するためにはたくさんの課題があります。なぜダイバーシティかというと、この課題を解決するには、社会の半分を占める女性の力なくしてはできないだろうと思うからです。新しい技術はいろいろな視点から生まれます。研究職という魅力ある職業に、ぜひチャレンジしてほしいと思います。

倉島　技術者としてIBMに入社し、さまざまなプロジェクトやサービス事業を経験し、昨年技術理事になりました。今はモバイル・サービスのCTO（最高技術責任者）として、モバイルを使って企業の業務改善を行っています。女性活用に関しては、弊社には全社的な女性活用のためのカウンシルや、女性技術者のコミュニティがあります。ここで先輩からいろいろなことを教わりました。私もまた後輩に伝えていきたいと思っています。

　意識の面では、前に出て行きにくいと感じている女性もいると思います。けれども自分の意見を出して多様性が生まれれば、自分のチームのイノベーションにもつなげることができます。自ら参加する意識が必要です。

ダイバーシティの必要性について

麓　なぜ研究技術の分野でダイバーシティが必要なのでしょうか。ダイバーシティの成果や進める上でのメリットを教えてください。

稲垣　私の研究分野は、ヒューマンファクターと呼ばれる領域で、学会に行くと半分以上が女性。男性にも多様な視点を持った人が多くいますし、女性の視点で研究が活性化されることも経験しています。例えば自動運転の技術開発では、障がいを持つ方や高齢者の視点やニーズも踏まえたうえで、あらゆる人々が快適・容易に移動できるようにする技術はどういうものかを検討していますが、ダイバーシティそのものといえる研究です。

庄司　私の専門は教育臨床や発達臨床などで、いろいろな困難を持っている子どもや学校の先生を支援しています。常々感じているのは問題の有無は境界が曖昧だということ。多様性を推進してマイノリティのことを考えているつもりが、マジョリティのメリットにも繋がっているということが多々あります。マイノリティ研究が、ひいては社会全体の役に立

つことになるというのも、研究を進める意義のひとつになっていると思います。

富樫　私は個人的には研究をやる上では男性女性は全く関係ないと思っています。ですが、マジョリティが陥りがちなステレオタイプな考えを抜け出すためには、今は研究の世界ではマイノリティの女性の観点は、生かすチャンスは多いと思います。

倉島　弊社ではプロジェクトによって男女の比率は違うものの、男女の区別はありません。男性も女性も同じように期待され、仕事のできる人のところに仕事は流れていきます。つまり、女性と男性が同じように働くメリットは、女性の有能な人をより活用することができ、全体を効率的に動かすことができるということだと思います。

働き方改革と生産性の向上

麓　二つ目は時間の使い方についてお伺いします。現在国の方針で働き方改革が推進されていますが、研究者、技術者の場合の働き方改革とはどのようなことなのでしょうか。また、その中で生産性を向上するのにはどうしたら良いのかをお答えください。

富樫　私が続けてこられたのは、30年以上前から子育てをしても働ける環境があったからです。これをもっと充実させれば良いと思います。リーダークラスの人にタイムマネジメントについて聞くと、子育ての限られた時間の中で何を優先するか順位をつけてやっていると、日々の忙しさの中で訓練され、それは子育てが終わっても活きていると多くの人が回答しました。

倉島　企業の場合は、時間で働く量を測るというのがなかなかなくならないのが現状です。残業が多い人が仕事をたくさんする人と見えがちなので、保育園の迎えがあるから早く帰る人は、働いている量が少ないと見えてしまう。生産性を加味した成果で評価を出せる仕組みが必要ですが、どうやって測るかが難しく、弊社でも評価システムを毎年変えながら試行錯誤しています。そういった取り組みを続けて行った先に、答えがあると思っています。

稲垣　マネジメントの観点にもダイバーシティは絶対に必要で、女性教員と意見交換をすると今まで気づいてなかったことが見えてきます。夕方5時以降に会議をしてよいかという問題は典型例です。各部局において会議はいつ行われているかを調べ、働き方改革につなげていきたいと思っています。

女性の昇進意欲を上げるには

麓　現在国は、女性の主導的地位の人を30％にする「2030」という政策の他に、女性役員の比率を10％にする「2010」という目標も掲げています。研究技術の分野で女性の昇進意欲を上げるためには、どのようなことが必要なのでしょうか。

富樫　私自身、望んでリーダーになったわけではなく、躊躇し失敗もしながらやってきました。けれどもいざなってみると、新たな自分の力を見出すこともできましたし、多くの人とスケールの大きな研究もできると気づくことができました。

倉島　弊社では尻込みする人はあまり見かけませんが、ステップアップする時には、誰しも戸惑う気持ちはあると思います。そういう時に、いいからいきなさい、一緒に頑張ろうと言ってくれる先輩や同僚が大事。一歩踏み出せば管理職にしかわからない情報や新しい発見があり、おもしろさに気づけると思います。

稲垣　大学にも尻込みされる方が少なくないです。先輩が背中を押してくれたり、同僚や部下から「ぜひなって」と言われるといいですよね。執行部が頼みに行ってもいいと思っています。

庄司　大学で管理職に就くには選挙と推薦と二つの方法があります。私は管理職に就いたとき、選ばれたからにはやらなきゃという気持ちになりました。前職はずっと男性だったので、男性がやらなかったことをやりたい、とも思いました。自分ではそう思っていなくとも、背中を押されることでリーダーという職務に前向きになり、生産性を上げられる女性はたくさんいると思います。

麓　女性の昇進意欲について日経ウーマンで調べたことがあるのですが、一般の女性に聞くと、45％が管理職は嫌だと回答しました。でも管理職の女性に聞くと、約70％が良かったと言っています。管理職という大きなプロジェクトを動かせる職に非常に満足しているんです。女性研究者、技術者にはこんなにすばらしいキャリアパスが待っているよということを、我々メディアもどんどん伝えていかなければならないと思っています。

自分らしく生き生きと

ダイバーシティ部門を担当することになって、この1年の間に、自分らしく生き生きと生きているたくさんの女性に会いました。そして、私自身が強く勇気づけられました。同時に自分自身のことを振り返る機会にもなりました。様々な生き方も折々の決断も、一つとして誰かと同じものはありませんが、一つとして間違っていたと思うこともありませんでした。ロールモデルの中から目標とする理想のモデルをみつけることは難しいかもしれませんが、その多様性は、どんな決断もチャレンジも可能だということを示していて、大いに勇気づけられます。

このロールモデル集にご協力いただいた方々はもちろん素晴らしい方々ばかりですが、「ロールモデルとして紹介される女性研究者は、素晴らしい方々ばかりで特別」と言われることがあると、私は少々違和感を感じてしまいます。女性研究者の皆様は、年齢や職階、職種、家族の有無にかかわらず、自分らしく生きていく過程で一つ一つの決断をし前に進む努力をして、今に至っています。その最初の決断やチャレンジの第一歩は、職に就くずっと以前に始まり、一歩ずつ積み重ねられ、そしてこれからも、何が起こるかは分かりませんが、それでも一歩ずつ踏み出していくのだと思います。それは何か特別なことではなく、一人一人が自分らしく生きているということだと思います。それだけのことかもしれませんが、それだけで素晴らしいと感じます。このロールモデル集をご覧になっている皆様が、第一歩を踏み出されたばかりでも、どこかに辿り着いていたとしても、次の一歩に悩んでいらっしゃるとしても、ロールモデルの皆様から勇気をもらうと同時に、今ここにいるご自身の素晴らしさを感じて、勇気をもって自分らしい一歩を踏み出していただければと願っております。

最後になりましたが、お忙しい中、取材や撮影に応じていただき、ロールモデルとしてご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。本ロールモデル集は、平成28年度科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」の助成を得て作成することができました。ご協力いただきました、つくば女性研究者支援協議会、DSO、関係者の皆様に感謝申し上げます。

国立大学法人筑波大学
ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター
ダイバーシティ部門長
三木 ひろみ
Hiromi Miki

TIDE

TIDE：Tsukuba Advancing Initiatives for Diversity and the Environmentとは、筑波大学、日本アイ･ビー･エム株式会社、産業技術総合研究所による平成28年度科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」の活動名「多世代に渡る女性研究者・技術者のシームレスエンカレッジモデルの実現を目指して」の略称です。

Diversity Division
Center for Diversity,
Accessibility and Career Development
University of Tsukuba

国立大学法人 筑波大学
ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター ダイバーシティ部門
〒305-8577 つくば市天王台1-1-1 Tel : 029-853-8504 Fax : 029-853-8505
E-mail : diversity@un.tsukuba.ac.jp http://diversity.tsukuba.ac.jp/

平成28～33年度 文部科学省 科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

Printed by ISEBU Co., Ltd.